

---

# 破天荒少女

安比奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

破天荒少女

### 【Nコード】

N5357A

### 【作者名】

安比奈

### 【あらすじ】

家に帰ると知らない人がいた！誰だよアンタ！？その日から日常が破天荒なものになっていく！目指せラブコメディ！（予定）主人公かなりの妄想癖を持っています

鍵が開いてたんだから泥棒って思ってもいいじゃない

「じゃーね佐奈。気をつけて帰るのよ」

「はい」

「変な人についていつちゃダメよ。帰ったら手洗いうがい忘れずにするのよ」

「あんたは私のお母さんか」

「母親がわりよっ」

「大丈夫だつて。じゃ、部活頑張つてネ」

「おうよ」

父親は生まれてすぐに死んだらしい

それから14年間、女手一つで育ててくれた母親も去年、交通事故で死んだ

母親が私の通帳にお金をたくさん残してくれたから高校を卒業するまでの学費や生活費は十分ある

一人ぼっちになってからおばあちゃんがよく家に来てくれたけど、おばあちゃんがギックリ腰になってからは私が風邪とかひかない限りは来てもらわないことにした

淋しくないって言ったら嘘になるけど、私にはおばあちゃんも友達もそばにいてくれた。だからこそ母親を亡くしたショックから早く抜け出せたのだ

いつもの日常は、学校が終わると直ぐに帰り、広告をチェックしてから買い物に行く。

お金があるっていつでも無駄使いして底をつかせるなんて母親に申し訳ない

唯一の贅沢としては住んでる所を変えてない事だ

なんか無駄に豪勢なマンションに生まれた時から住んでいる

家賃は高いかも知れないけど思い出がたくさんつまっているし近所

関係をまた一から築いていくのは苦手な事だ

家に帰ると玄関の鍵が開いている

「アレ？なんで…？」

おばあちゃんが来てるのかな？？他に開けられる人なんていない

「ただいまー。おばあちゃん来てるのー？」

しかしリビングから出てきた人は私の祖母ではなく

「お帰りなさいませ。ご主人様」

この現代において、そうそうみない服装をしたカッコイイお兄さん  
だった

だから疑われるような事するからそんなこと言われるんだよ。

んーと、話を振り返ると

『学校から友達と別れてお家に帰ると知らないお兄さんが

「お帰りなさい」

って言うてくれましたとさw』

めでたしめでた…しじゃないっ！！

まず、誰！？なんでここにいるの！？どうやって入ったの！？

「どうなさいました？上がらないのですか？」

「えっ…あっハイ上がります」

っ小心者の私が初対面の人に質問攻めになんてできるわけないじゃない！！

「愛用のスリッパはどれでございますか？」

「え？」

スリッパの趣味を聞いているの？正体はスリッパー！？（スリッパの

形動詞。作、私）

「これですか？」

「ハイ」

って知らないスリッパーに私のスリッパを教えてしまった！チクシヨー次はどうでるのスリッパー！

「お手をどうぞ。ご主人様」

………そういえばさっきもご主人様って言われたような…？聞き間違  
い？てか、手を差し出されても…。

試練？これは試練かしら？

これは流れにそって手を乗せてスリッパをはくべきなの？

やったらやっただでドン引きされて、あげくの果てにはどつきりカメラーとか言って写真撮られて学校にばらまかれたりするの？？

あるいは、手を乗せたが最後そのまま誘拐！？ちよっ待ってよ！

私を誘拐しても払ってくれるべき親は二人とも存命ではないのよ！

あーじゃあこの場合誘拐じゃなくて強盗なのかな

「佐奈様？ご気分でも悪いのですか？」

オウッ美しい顔がどアップにつ

「なっんでもないです」

「そうですか。」

いつまでも玄関に突っ立っている訳にはいかない。

勇気をだして聞いてみた

Q・貴方は誰ですか

A・貴女の専属執事です

…って執事いいい！？

外から帰ったらすぐに手洗いうがいをしましょう

執事って…何？

あれだ。めえゝってなく…それは羊

え、何？もしかして今、巷で流行ってるアレ？

メイド喫茶があるから執事喫茶も みたいなノリで友達が行きたい  
って言ってたあの執事？だいたいがセバスとかそんな名前のあれ？

「えっと…」

「混乱なさっているみたいなので詳しい話は中で話しましょう」

そう言ってるリビングに通される

いや、私の家なんですけど

リビングに入るとなんか変な感じがする

「どうぞ」ソファに座ると高そうなカップに入った紅茶を差し出される

だから私の家なんですけど

しかもこんなカップ持ってない！って事は執事さんの持ち物？

フツそうか、中に睡眠薬とか入ってる眠らした後にお金を奪うって寸法ね！？

残念だけどお金は必要最低限しか持ってないのよ。財布の中に入ってるのはせいぜい5千円ぐらいで…

「飲まないのですか？あ、それとも紅茶はお嫌いでしたでしょうか？」

「あ、飲みます」

私は所詮NOと言えない日本人よっ

「お砂糖は？」

「5個で」

「多いですね」

「甘党なのよ」

それでもちゃんと5個入れてくれる

あ、いい香り。カップも高そうなら紅茶も高いのかな？紅茶なんてリプオンしか知らないわよ

「それでは事の始まりを簡潔に申しあげます。」

あ、美味しいー。こんな紅茶初めてだわ

「貴女は隠し子です」

ブッフ

紅茶噴射

もったいない…じゃないっ！

「今…なんて？」

「貴女は隠し子です」

やっぱり聞き間違いじゃなかったのね



## 今時そんな手にひっかかる方が珍しい

はいじゃ次は隠し子ってなんでしょう

1 隠れんぼしてる子供

2 神隠しにあつた子供

3 なんでも隠す子供

4 浮気したら子供ができちゃった 隠しちゃん

「……で？」

「4です」

1 番外して欲しい答えをいただきましたー

「えっ…だって、お母さん…そんなの一言も…」

「奈々さんがまだ存命の頃は佐奈様も幼く意味も理解出来なかったでしょう」

そーですねー。

って待て待て、流されるな私！さっきまでの私を取り戻すのよっ

確かに私のお母さんの名前は奈々だ。それ以前にあのほえほえしてた母親が浮気だなんてっ！？

「それじゃ貴方は私が隠し子であるのとなんの関係があるんですかつ」

まさかお母さんの浮気相手がこの羊さん（違）なの！？そういえばお父さんの遺影とか今まで見たことなかったし…

「私は貴女のお父様に雇われ、佐奈様の世話係でもある執事の者です。佐奈様を本家にお連れする為にお迎えに上がりました」

「…本家??？」

「本家です」

いや、本家って何？そんなたいそれたもんなの？

「ってかお迎えって…」

入った時から薄々気付いてたけど…

「はい。明日から本家に住んでいただきます」  
この部屋の荷物が家具以外なくなってる！  
「ちよつと待つてよ！？そんなの急に言われたって…」  
嘘でしょっカメラどこよ。カメラカメラ！カメラでてこいつ  
「佐奈様？何を探してるんですか？」  
「あ、いえ。真実の術を見いだすべく…」  
どつきりカメラを探してますなんて言えない…っ  
「ああ…信じれませんよね。急にこんな言われても」  
「はい。だから嘘なん…」  
「ですので本家に来て下さい」  
話のこしを折られたっ  
「あたし、ここを引つ越すつもりはありません」  
引越して欲しけりや隣人に布団叩きの名人を連れてこい  
「今日は戻ってきますから」  
こうなったら駄々をこねてやる  
「いやだ」  
「顔を会わしたらずぐに帰ってもよろしいらしいので」  
「嫌ーだー」  
「行きますよね？？」  
「いや…だ」  
「そんなに嫌ですか？？」  
「嫌です」  
「いいでしょう？」  
「嫌です」  
「嫌です」  
「嫌でしょう」  
「いいです」  
アレ？？  
「さあ行きましょう」

…っはめられたー!!

## 世の中には言っていない事と困る事がある

執事についてわかった事

なかなかのS。

前回、見事な口車に乗せられYESと言ってしまったが、それでも渋っていると執事は手慣れた手つきで私を担ぎあげ下に止めてあった車にほうり込んだ

ちよつと恐怖と殺意を覚えた

「拗ねないで下さい。ご主人様」

何がご主人様だ

「私、貴方の主人になったつもりはないんだけど」

これからずっとそっけない態度でいてやる

「そうですね。まだ正式な任命は受けてないです」

「てか、あんたの名前聞いてない」

やっぱりこいつ誘拐犯じゃないの??

「口が悪いですね。いけませんよ? まあ、私が一から教育して差し

上げますが…(薄笑)

「このサドっ」

「……………」

あつ…つい思った事を口に出してしまった…

怒ったかな? やだなー。走行中の車からほうり出されたりするのかな

「アレ? よくわかりましたね? では改めまして佐渡圭介です」

当たっちゃったよ! つか性格に正直な名前だなライ!

ふと窓の外を見ると木で囲まれた大きな公園みたいな所のそばを走っていた

しかし公園の割に遊具がなく子供もいない

綺麗な噴水があるだけ

「ああ、つきますよ。」

「え?？」

公園の回りを見渡すが国立図書館みたいな建物以外見当たらない  
反対側は商店街の入り口と道路しかない

「え、どこ? 商店街?」

「逆ですよ」

頭を掴まれ逆を向かされる

さつきから気付いていたけどこの執事、私の扱いだんだんひどくな  
ってきてないか??

「アレです」

執事が指差したのはさつきの図書館

「あれ図書館でしょ? え、遠回しに勉強しろって言うてる?」

「遠回しもなにも勉強はしてください。違いますよ。あれが本家。  
第一邸宅になります」

「へえー。で、誰ん家? あんた?」

あんな大きな家見たことないわ。さてはこの執事、金持ちだな

「… 貴女の家ですよ」

そっかああたしん家かぁー…………… って!

「ミツ… ミー! ?」

動揺して思わず英語

それに便乗して執事も英語で

「イエス」

やたら大きな門をくぐり、さつきの公園が本家だということがわか  
った

## 迷子の小猫より犬のお巡りさんの方が泣き虫

ここはどこ。私は誰。

体育館ほどある広い空間

いや、広すぎでしょ。扉多すぎ。窓多すぎ。

家と呼ぶにはでかすぎるこの屋敷に圧倒されながら何とか自分を見失わないでいた

「佐奈様。先に部屋に行かれますか？それとも貴女のお父様にお会いになりますか？」

「お父…さん…」

そういえば、なんで今頃になって私の父親が名乗り出たのか。

母親が死んでから一年が過ぎた

こんなにも大きな家なんだから母親が死んだなんて情報はすぐに入ったハズ

なんでいまさらになって…

「会う。生まれてこの方会った事ない父親とやらに会ってやる」

そして直談判してやる。とりあえず、ココに住むなんて冗談じゃない。

でも、そしたらコノ執事がくつついて離れなくなりそう

うわぁ嫌だ。ずっと一緒になんて

「何か失礼なこと考えてません??」

「いえ。ナニモ」

心を読まれた!?!いや、顔に出た!?

「……まあいいでしょう。ではついて来てくださいね」

「ハイ」

右側の5つ目の扉を通ると長い廊下になっていた。少し先に大きな甲冑があつた

スゴイ……本物かな?てか、普通にこんなのが置いてあるのがス

ゴイ

「遅れないで下さい」

気付けば立ち止まっていたみたいで執事が結構離れたところにいた  
「ねえ、アレ本物？」

執事に追いつくと尋ねてみた

「ええ、本物です。中世のヨーロッパの・・・この後は血なまぐさい話になりますけど、ききますか？」

「止めとく」

言っておくが私は怖い話やグロイ話が大嫌いだ。なんでって眠る前に思い出してもっと怖い想像をしてしまう（妄想癖だから）

「曲がります」

十字路を左に曲がる

少し進んでまた丁字路にあたる

「なんか迷路みたい」

だって十字路とかがありえない？

「迷路ですよ」

「え？」

今なんと？

「迷路なんですよ。佐助：旦那様の趣味でしてね。泥棒対策でもあります」

つまり方向音痴の私に迷えということかしら

「佐助？」

「貴女のお父様のお名前です」

「ふうん・・・っ!？」

「どうしました？」

前を見ると廊下の前方に大きな黒い犬らしき物体

「いいいつ犬!？」

「ああ、アントワネットですよ。アントット!!」

ちよっ呼ぶな！私が犬嫌いつて知っての行動!？てか何ソノお菓子みたいな略し方！

「いつ・・・」

近づいてくる大きな物体。でかい、目茶苦茶でかい  
何食ったらそうなるんだよ!?

とりあえず・・・怖い!

「イヤアアア!」

「ちょ・・・どこ行くんですか!?!」

体を180度回転し全速力で走る

「執事と離れる

「迷子

全くもって見知らぬ風景

とりあえず叫んでおく

「ここはドコ!私はドコ!?!」



迷子の小猫より犬のお巡りさんの方が泣き虫（後書き）

一つの話がだんだん長くなってきたる気がする

## 逃げるが勝ちって言葉もあるよ

まあ！お庭に蝶々がいるわ！わあ！綺麗なお花だこと！アハハウフ  
フアヒヤヒヤヒヤ…

うん。現実逃避してみても何にもならない  
とりあえずココはどこ？方角すら分からない

てか、こんなにもでかい屋敷なんだからお手伝いさんの一人や二人  
すれ違ってもいいと思うんだけど

いままでにすれ違ったのなんか鎧と絵画しかない

迷路の基本の右手を壁につけて歩くという方法をしたが同じところ  
をくるくる回つてると気付いき、二度としないと誓った。ちなみに  
同じと気付いたのは15回目だ

一人になると母親が死んだときを思い出してしまいそう。家はテレ  
ビだってあるし、近所の人もよくしてくれるから寂しくないけど、  
ココは知り合いが誰もいない

執事がいるとこないじゃこんなにも違うなんてしゃくだが今はすご  
くそばにいて欲しい…気がする

「また逃避しよかな？メルヘン系はさっきやったし昼メロ系も火サ  
ス系もやったしな…」

「君、だれ」

「えっ…」

振り返れば美青年。久しぶりに見る人間。やっとたどりついたオア  
シス（大袈裟）

しかしオアシスの水は腐ってたみたいだ

「名前は？なんでこんな所にいるの？てかどうやって入ったの？メ  
イド…にしては若すぎるか。何歳？小学生？」

うあ、私が執事にしたかった質問を躊躇いもなく聞いてきやがった  
しかも小学生じゃない！童顔はお母さんの遺伝よ！

「あんたこそだれ。先に名乗りなさいよ」

少しきつめな口調で返す

理由は少し執事に似てるから（顔立ちとか背格好とかが）

反抗するとは思ってなかったらしく少し驚いた顔をする

「僕の名前は東条奏汰。この家の一人息子であり次期当主であり東条グループの全てを担う者さ。それで、君は？答え次第じゃ警備を呼ぶからね？」

一人息子…って事はこの家のお坊ちゃまか。どうりで偉そうなんだ

「私は…」

「佐奈様！」

背後から執事の声が聞こえた

何故か逃げたくなった

「奏汰様！佐奈様を捕獲して下さい！」

「お前、佐奈って名前か。」

左手首を掴まれる。てか捕獲って私は動物園から逃げだしたワニか

「佐奈様…急に逃亡なさるので捜索に苦労しましたよ」

すごく冷たい視線を浴びせる執事。怖いから。

「こいつ、脱獄犯かよ」

そして的確なツッコミをありがとう。

「いえ、佐奈様は佐助様の隠し子…つまりは貴方の妹ですよ」

「へえ…いもう…って妹！？」

つまり、私のあ…って兄！？

逃げるが勝ちって言葉もあるよ（後書き）

あれ、奏汰のモデルはTニスのO子様のA部K吾だったのに

## 聖徳太子はすごい耳を持ってたようだ

ただいまの気分

『動物園の動物』

素敵な視線を感じながらもただ今大ブレイク中の佐奈です  
毎日のレッスンは厳しくて泣いちゃう事もあるけど頑張って練習して  
ますっそれでは聞いて下さい  
私のデビュー曲『このまま現実逃避し続けてもいいかな?』

話が進まないなので現実を見ます

視線で人が殺せるなら私は即死してます  
まず執事からはよくも手間かけさせやがってというところでも冷たい  
視線を感じます。正直痛いです。視線で殺せなくても外傷が付きそ  
うなほど痛いです

一方、兄っぽい人物は好奇心溢れた視線を向けて来ます  
見定める視線です。つまりは上から下まで満遍なく見てきます。こ  
れが兄妹という関係でなく上司と部下ならセクハラで訴えられると思  
います。

これを友達に言ったら美形二人に囲まれて羨ましいと言いそうです  
があいにく私にとつては兄と執事です

しかも今日会ったばかりです

設定としては萌えるかも知れませんが主人公としては萌えれません  
とりあえずこの妙な沈黙を破りたいと思います

「あの…」

「へえ、コレがああ奈々さんの」

「ええ、似ておられるでしょう?」

「言われてみればそっくりだな」

あれれえ?沈黙を破ったのは私なのに私の言葉は無視?(コロン君

風に)

「佐奈様。旦那様の所へ

「疲れた」

この家広すぎなんだよ。疲れてないあんたがすごい

「佐奈。俺の事、奏汰お兄ちゃまって呼ん

「嫌よ」

お兄ちゃまって何。てかあんた何者だよ。

「それならこれから急にいなくならないで下さい。私がどれだけ探したと思ってるんですか。それに…」

「なんでだよ。呼べよ。だいたいお前は…」

うあつW説教!?

てか二人一緒に喋るから何言ってるか聞き取れない

逃げようにも奏汰さんに手を掴まれてるから逃げれない

どうしようもないから黙って聞いているフリをしてると前から、つ

まり二人の背後から人がやってくる

「あ……」

もしかして…この人…

「「聞いてるんですか? (のか?)」」

「何をしてるんだい?」

その人の声に勢いよく振り向く二人

「お父様…」

「旦那様…」

奏汰さんの父親って事は

「楽しそうな声が聞こえてね。君は……佐奈かい?」

私のお父さんなのかな

話が大きく逸れて一回転して元に戻るとうれしいなあ

旦那様（お父様）が現れた

佐奈は逃げるを選択した

「どうして貴女はいつも逃げようとするのですか」

執事にばれた

佐奈は逃げ切れない

「さあご主人様

「佐奈はお嬢様だろ」

ここで兄の鋭いツツコミ

ソコこだわるところ？

「ああそうですね。お嬢様、貴女のお父様ですよ」

ノリでだいたいわかってたけどそう言われたら少しは緊張する

「父…親…ですか」

深く知らない私は父親〃母を捨てた極悪非道人間としか見てない

「お父様」

「どうしたんだ？いつも態度がでかいのに…熱でもあるのかい？」

「べつ別に佐奈の前だからかしこまってる訳じゃねえぞっ…違うからなっ」

これなんてツンデレ？

てか、キャラ濃いなーここらでキャラ紹介しといた方がいいんじゃないの？

「今更じゃありませんか、お嬢様」

執事のくせに心を読むな

「キャラが大幅に変わってますよ」

久しぶり過ぎて作者自身忘れてんのよ

ってか小説に作者だしちゃダメでしょ

「佐奈様が小説とか言ってる時点で物語りが狂ってきてますが」  
じゃキャラ紹介だけいってこー

まずは（カッコイイ）執事

って何カッコイイ付けてんのよ

「いけませんか？」

性格、ナルシスト。

執事としてはプロなんじゃないの？知らない？

「最高ですよ」

あーはいはい。んでクール……？

「なんで疑問系なんです」

クール〃ツツコミっていう私の方程式が……私、ツツコミやってる気がする……

「ああツツコミでしょうか？グーとパーどっちがいいです？」

殴ること前提！？

ま、いいや次！兄の奏汰！

「私の名前は紹介してくれないのですか」

あー……えー……たしか……佐渡さん……？

「忘れてましたね」

そっそんな事ないヨー

「怪しいです。怪しいついでに次回に続きます」

続けるの！？

「その間にじっくりとお話しましょうか、佐奈様」

や……ちょ……

終わらないでえええっ！



## 続くのに続くので続くと続けば

前回のおさらい

ある日、家に帰ったら部屋に…

「そこからいきますか」

えーでっかい屋敷に連れてこられ父兄と名乗る人間に出会いました

「おおざっぱですね。どうしました」

そっちこそどうした。ちゃんとツツコミ入れてるじゃん

「貴女の言動に苛立ちを覚えたので」

これ本当に執事？失礼すぎね？

ま、いいやキャラ紹介ね

兄？？の奏汰さん

「また疑問ですか」

だって血の繋がりのあるのか本当にわかんないし似てないし

「似てますよ」

えー…

「嫌なんですか」

私、妙なところでツツコミ入れるようなキャラじゃないし

「それは奏汰様がオタクだからです」

わー衝撃の事実ー

「にとしては棒読みですが」

どっちかってと笑劇って感じ

「失礼では」

あんたに言われたくない

ってか全然話が進まないじゃん！何の陰謀だよ！

「奏汰様はIQが200あります」

またどうでもいい事実を

「出会ったばかりのくせに奏汰様の何を知ってるんですか！」

あんたは何キレしてるんですか！？

「キレてませんよ」

あんたのその顔でそのネタ止めて  
てかもう執事が奏汰さんの紹介したらいいじゃんか

「奏汰様は、高校の生徒会長です」

あーそんな感じはするわ。 ってか金持ちの坊ちやまのセオリーだよな  
「女性にもてます」

カッコイイっちゃカッコイイもんね

「オタクです」さっき聞いたし。なんでそこをブッシュすんの  
「後はシスコンです」

へえ奏汰さんに兄弟いたんだ。一人っ子かと

「一人っ子ですよ」

え？

「貴女を含めれば二人兄妹です」

…何もいうまい

「以上です」

まあ随時追加していけばいいか  
次ー父親

「旦那様は…」

ぶつちやけると何も決まってるない

「なんで出したんですか」

知らないわよ。過去の作者に聞いて

「あ、旦那様と私は小さい頃は仲悪かったです」  
何その事実！？

「ま、これもまた次回」

またこのタイプで終わんの！？

「焦らすのが好きなんです」

う、うわー（´、`）

校長な話は声としゃべり方に問題があるから退屈なんだ

あれは私がまだ小学生の頃でした

私は旦那様と従兄弟でこの屋敷に事情があつて住んでいた時期があつたのです

その時の当主だった旦那様のお父様、つまり佐奈様の御祖父様のご好意により私は不自由な生活を送っておりまして

しかし、それをよく思わない人もいた

メイドにも党閥があり、私はその一派に気に入られなかった理由は単なる嫌がらせだと思う

メイド達のストレスのはけ口に私はどうする事もできなかった

居候の身ゆえにおじ様に文句を言えばこの家を追い出されてしまう幼い私は孤独という恐怖に敏感だった

そして、比べるようにして旦那様……つまり佐助様が私よりも何倍も贅沢な優遇をされるのを、私は醜くも嫉妬してしまった

嫉妬は惜し気もなく憎しみに変わった

同じ屋敷にいらながらも私は佐助様を避けるようになった

同じ空間に居ながら一言も会話をしない

そんな生活が3ヶ月続いた頃に変化は訪れた

「話についてきてますか」

「長い。くだくだ」

「何を今更」

「もっかいまとめると、帰るとあんたが家にいてでっかい家につれてこられて兄とか父とかにであつてらちがあかないから執事の昔話

なんか出して流れを変えようとして」

「でもぐだぐだに」

「所詮ギャグを目指してんだからあんたのしんみりした話なんかいらないわ」

「失礼ですね」

「流れを本格的に変えましょう」

「これぞ今更」

「いいのよ！ギャグなんだから！」

「ギャグという言葉に全てを任せすぎでは」

「うっさいわねー。あんたは執事ってキャラたってんだからいいじゃない！眼鏡つけるかコラ！」

「ハッ私に萌えを求めてらっしゃって？」

「ちよっなんでそんな強気で行くのよ！アンタはやられキャラで行きなさい！」

「ええ、なんかもうお嬢様のキャラにやられ気味ですよ」

「じゃ次から新説・破天荒少女って事で」

「いままでがキャラ立ちしてないのに話を進めようとしたからぐだぐだになったんですよ」

「敬語って逆にいらってくるの知ってる？」

「もちろん」

「ならヨシ」

校長な話は声としゃべり方に問題があるから退屈なんだ（後書き）

変わります。変わりたいです

## 新説少女1

「で、よ」

キヤラ立ちして勢いがあるうちに言っておこう

「なんですか」

「正直、主人公がボケってのは辛いものがあるの」

ツツコミの方が心理描写しやすいって理屈

ボケの考えてる事はわからないってのもあるけど

「それで」

「変わって」

よしっ言った！言えた！

正直、ここで喋るぐらいなら口に出した方がいいとか思ってたのよね  
読心術は当たり前だし

「嫌です」

「なんでよ！いいじゃない！ってか今までぐだぐだだったのはあんなが意味不明だったからでしょ！」

何考えてるかわからないって：娘に冷たくされた親父の心境かつ

「それは確かにそうですが、私にツツコミが出来るかどうか」

「まさかのツツコミ放棄！？」

待って、主人公の佐奈はボケしか出来ません

てか破天荒少女ってタイトルなのに破天荒じゃなくなるじゃない  
ってかほかにツツコミがないじゃない！！

兄！？まさか父にやらすの！？無謀すぎるよね？？

「ほら、考えてる内にだんだんぐだぐだに…」

わかってる。わかってるが…

「お前が言っなああ！！」

ちやぶ台をひっくり返したいわ！って佐奈がツツコミいれちゃった  
し！

「なんなのよアンタ！ツツコミじゃないのー！」

「え……」

「そこで戸惑った顔をするなああ」

ダメだ！このままじゃ繰り返しだ！

そうになったら俺のターン

「トランプカード発動！！視点を強制的にチェンジ！こつからは執事視点！これ決定！もうかわらない！」

「そんな子供みたいに……」

大声で叫ぶ佐奈様を尻目に紅茶を煎れ始める

あ、皆様はじめまして執事視点です

何故紅茶を煎れているのかと申しますと興奮した佐奈様を落ち着かせる為にお茶でも飲んで……という訳にございます

「視点を奪った途端急に黙り混むなー」

佐奈様自体、視点交代に不安の種が消えたのか落ち着いてきた様子ならこの紅茶いらさないか

「ちよっあんだ天然！？普通無言で飲み干さないでしょ！執事が喋れば喋るほどキャラが独り歩きして尚且つ歪んだ方向にフルマラソンなんだけど！」

「独り歩きのフルマラソンですか」

率直な意見をずばりと

「……………」

すると黙り混むお嬢様

「佐奈様？」

「それよ！それ！その的確なツツコミ！」

心なしか輝いてらっしゃる

「賢いはずなのに体からアホっぽいオーラが出てたのよ！やればできるじゃない！」

「そうですか。それなら私も言いたいことが」

言っても言いだろうか

いや、言わなきゃ話が終わらない

「キャラ変わりましたね」  
「アンタが言うか」



とりあえず決着つけようや

「で、よ」

また同じ入りで話を展開しようとするお嬢様

この人、頭が弱いのでしょうか

「あんたが何を考えてるか分からないけど見下したような目でみなくてくれない？」

思ったことが顔にでていた模様

執事としてまだまだです

とりあえず、場面の展開をしましょう

今まで眼中になかった父兄はどうしようもなくそこに佇んでおられます

「圭介・・・キミ、執事のくせに主人のボクを無視するのかい？」

二人の世界を抜け出したのが分かったサスケは執事に文句を放つ父親のキャラでさえ決まっていなかったから仕方ない

「今の私の主人は佐奈様ですので」

そういつて佐奈の肩に手を置く執事

嫌そうな顔する佐奈

「いつからそんな口答えするようになったんだい」

この主人、言うことがBLくさい

なんてことは思っても口にしません

BLを狙ってる訳じゃないので

「クフフ」

佐奈様が怪しげな笑いをしました

ちよつと佐奈様の性分が垣間見れた気がします

「ならここで話をつけましょう。佐奈様はここに住居を置きたくないそうです」

このセリフに娘は頷き、父親は顔をしかめ、兄は駄々をこねる

「えー！住んでよ！」

「いやです」

佐奈様の一刀両断。奏汰様は泣きそうだ

「えっ・・・」

正直いい年なんだから直ぐに泣くのはやめていただきたい

そして父親も嫌な顔で私を見てこないで欲しい

どうしてこの家の男子はまともではないのだろう

「私は今の生活を崩したくないんです」

そしてイキナリ話始めた長女

とりあえず次に回しましょうか

この話

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5357a/>

---

破天荒少女

2010年10月12日02時52分発行